

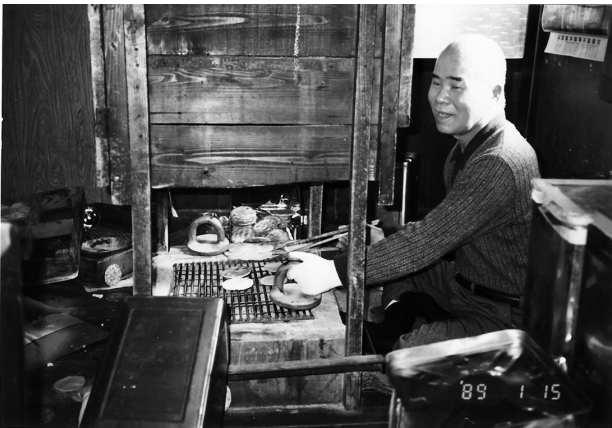
もくじ

花畑周辺の煎餅製造業…P1 はい、文化財係です④「天保餓死者供養塔」…P2
お化け煙突60年⑭煙突①…P4

【写真1】在りし日の和井田家住宅
煎餅を焼く仕事をしていた。
昭和四十七年（一九七二）



【写真2】鈴木繁三郎商店（保木間五丁目）
平成元年（一九八九）
筆者撮影



花畑周辺の煎餅製造業

鈴木恒雄

足立史談

第676号

2024年6月15日

足立区立郷土博物館内

足立史談編集局

〒120-0001

東京都足立区大谷田 5-20-1

TEL 03-3620-9393

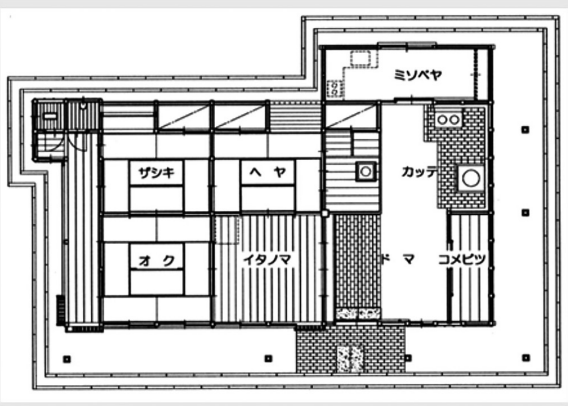
FAX 03-5697-6562

はじめに

花畑地区北部では昭和三〇年代頃までは、各所で煎餅が焼かれていた。現在は、ほとんど消滅してしまったが、その面影を、和井田家【写真1】の例からたどってみたい。

■花畑周辺の煎餅製造

昭和二〇年から三〇年代にかけては、花畑地区北部周辺では八軒の煎餅製造業【次頁表1・図2】がみられた。この内、工場方式で煎餅生地を製造していたところは、山崎煎餅と高橋食品であった。あとは、家内労働で、煎餅生地を購入して、自宅の作業場で火鉢で煎餅を焼いていた。煎餅生地とは、うるち米を蒸して餅状にし、煎餅状に成型したものである。和井田家では、当時の主人である



【図1】和井田家住宅間取り図

ミソベヤ（味噌部屋）が煎餅を焼く場所になっていた。ミソベヤは、農家建築のなかにある部屋名称で、かつては名前の通り、味噌や漬物などを作り、置いておく部屋だった。

■煎餅の製造・出荷その他

煎餅製造には、この付近では、本場の草加煎餅の店で習得していたと思われる。近所に煎餅焼きをやっている所があれば、そこで技術を教わったと推定される。鈴木繁三郎さんの話では、草加の仲間から手焼きの技術を教わったという。

和井田家、保木間の鈴木繁三郎商店【写真2】とともに煎餅生地は、地元の花畑煎餅から購入していたようだ。出荷は、草加、川口方面にしていた

栄一さんが昭和二〇年代頃から煎餅を焼き始め、昭和三十七年（一九六二）頃まで行っていたと推定される。和井田家住宅は、区に寄贈され都市農業公園に移築されて、昭和五十九（一九八四）年に公開されているが、この茅葺屋根の北側のミソベヤ【図1】で焼いていた。煎餅発祥の伝説では、現在の草加市松原の茶店で、余った団子を焼いて客に出したのが、その始まりという。しかし煎餅の製造工程を知ると、そんな簡単にできるものではないことがわかる。煎餅製造には、手間ひまがかかり、それなりの経験、技術がないと、製品として成り立たない。

和井田家、保木間の鈴木繁三郎商店【写真2】とともに煎餅生地は、地元の花畑煎餅から購入していたようだ。出荷は、草加、川口方面にしていた

【表1】花畑周辺の煎餅製造業

1960年～1970年ごろ

鈴木恒雄作成

No	名称(屋号)	業務形態	所在地	No	名称(屋号)	業務形態	所在地
1	鈴木繁三郎商店 (しげちゃん)	手焼き	保木間5	5	和井田家 (はんべえどん)	手焼き	花畑2
2	新井米菓 なし	機械焼き	保木間5	6	芦川商店 (だんごや)	手焼き	南花畑4
3	金杉家 (とりちゃん)	生地製造	花畑4	7	野島米菓 なし	生地製造	花畑7
4	山崎煎餅 (せんべや)	生地製造	花畑1	8	高橋食品 (せんべや)	生地製造 機械焼き	花畑7

ようだ。他には、製造場所まで、個人的に買いに行く場合がある。私も小学校三、四年生ころ、都心に住む

親せきに土産にするなど、個人で和井田家の製造場所まで買いに行き、そこで濡れ煎餅をもちそうになった

経験がある。その時はミソベヤの東口から入っていった。当時、煎餅を手焼きで焼いていた

【図2】花畑周辺の煎餅製造業分布図 (Noは表1による)



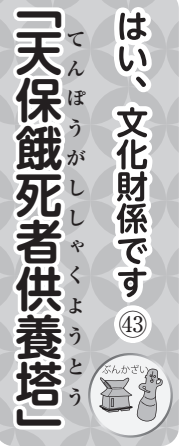
1万地形図 1987 八潮、草加 国土地理院に加筆

のは、鈴木繁三郎商店、和井田家、芦川商店で、高橋食品、新井米菓では、すでに機械化していたと推定される。なぜか、機械的に焼くと煎餅の焼きむらが出てきて、固いところをかむと歯を痛めることがある。その点、手焼きは備長炭を使用して費用と手間がかかるが、芯が抜けて、軟らかく仕上がり、食感も素晴らしい。煎餅は、元来、兵糧食ではなかったかと推定しているが、中華屋台の焼餅(しゃおピン)は、字づらは似ているが、似て非なるものである。昔は外米が生地に入っていると、なんとなく違和感があり、わかったものである。

鈴木繁三郎商店の主人の話では、南極観測隊も、この煎餅を繋船中に積み込んで、南極にもっていったというのが、自慢話であった。やはり、兵糧食の推定はあたっていた。鈴木繁三郎商店では平成十二年(二〇〇〇)頃まで焼いていた。

■煎餅の製造の現在

盛んであった煎餅製造も、近年、大手菓子メーカーの甘い柔らかい煎餅や菓子に負けて、ただ一軒、野島米菓が営業しているのみである。昭和時代に育った私としては、当時の唯一のお菓子、煎餅だけとっても、隔世の感がいなめないものである。(博物館解説ボランティア・花畑在住)



はい、文化財係です

(43)

てんぽうがししやくようとう

「天保餓死者供養塔」

となり、飢饉となることが多くありました。また、戦争による飢饉や、商人による投機的な経済行為により流通がストップし、飢饉となるような人為的な原因もあります。

戦後の食糧難を乗り越え、高度経済成長によって豊かになった日本は、かつて「飽食の時代」を迎えたと言われました。近年では、食品ロスが話題となることが多くなっています。そうした現代を生きる我々には想像しにくいことですが、昔の人々にとって飢饉は深刻な問題でした。そこで、今回は、飢饉に関する文化財として、金蔵寺（千住二一六三）の「天保餓死者供養塔」（足立区登録有形文化財（歴史資料））をご紹介します。

金蔵寺は、真言宗豊山派で、氷川山地蔵院（または閻魔院ともいう）と号します。本尊は閻魔大王で、建武二年（一三三五）三月の創建と伝われます。

■飢饉の歴史 飢饉の原因は様々です。現代のように、農作物の技術が発展していなかった時代には、天候不順などの影響により、作物が不作



天保餓死者供養塔

どが有名です。以上のように、昔の人々にとって、飢饉は非日常ではなく、日常だったとすら言え、むしろ現代の方が歴史上稀な時代と言えるのです。

■天保の大飢饉 金蔵寺の「天保餓死者供養塔」は、天保の大飢饉に関する文化財です。

天保四年（一八三三）は冷害により、東北・北関東地方で凶作となりました。「飢饉は二年続く」ということわざがあるそうですが、天保五年も天候不順が続きました。

さらに天保七年には収穫量が例年の四割にとどまり、米価が高騰しました。その上、さらなる儲けを得ようとした商人が米を買い占めて米価を釣り上げたため、庶民は米を手に入れることができなくなり、食糧難が深刻となりました。また、商品である米の生産量が減ったため生活でなくなり、行き倒れとなった者たちであふれたと言います。同じころ、洪水や疫病なども流行したため、天保七年から八年にかけて全国では二〇〇三〇万人もの人々が飢餓や疫病などで亡くなったと推定されています。

■天保餓死者供養塔 餓死者を供養するために、千住二丁目名主永野長右衛門が世話人となり、天保十一年に建てたものです。高さ二メートルほどの無縁塔で、正面に「無縁塔」とあり、側面には建立の由来が刻まれています。

碑文を一部ご紹介します。

（前略）天保八年のとし、その年いかなる年にや有けむ、飢え

て下民に食なし、忝も上、救屋を造て扶せ給といへども、或疲、或病て此地に死せる者八百二十八人、他に数ふるとまあらず、三百二十一人を勝専寺に葬、六十一人を慈眼寺に葬、七十六人を不動院に葬、三百七十七人を金蔵寺に葬、（中略）此のなき人らが霊を弔ふ無縁の塔と記し侍れど、（後略）

幕府は、救小屋を建てて飢えた人々の救済を図りました。しかし、飢えに疲れ果て、病んだ人々の多くが亡くなり、千住でも八百二十八人が亡くなりました。千住宿には東北諸藩からの流入者も多くおり、こうした人々も多く亡くなったとみられます。そこで、亡くなった人々を勝専寺（千住二一一一）・慈眼寺（千住二一一九）・不動院（千住一一二二）・金蔵寺の四カ寺に分けて葬りました。金蔵寺には全体の四割を超える三七〇人が葬られたのです。「天保餓死者供養塔」が完成した時、近隣から数千人の人々が集まって法要が営まれたと伝わります。

天保の大飢饉は、多くの死者を出した悲惨なものでした。「天保餓死者供養塔」は、そうした惨状を伝える貴重な文化財です

（佐藤貴浩 文化財係学芸員）

お化け煙突60年⑭

煙突①
格和宏典

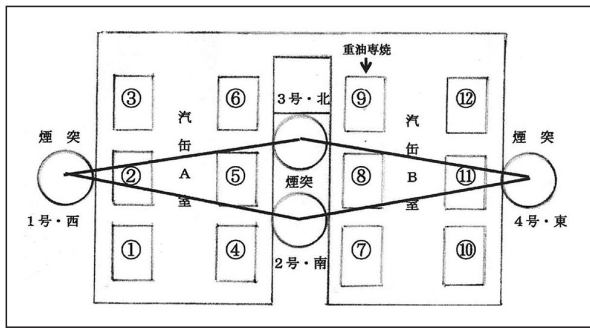


図1 煙突の配置



煙突の解体作業

■煙突の配置「お化け煙突」の名前の由来は皆さまご存じのとおり、①水力の予備火力時代は、一年を通して数カ月しか稼働しなかったため時々煙の煙突を見て、「お化けのようだ↓お化け煙突だ」と。②映画「煙突の見える場所」で煙突を見る方向によって一から四本に変化することが紹介され、「お化け煙突」と。現在は②が知れ渡っています。

煙突は鋼板製耐火煉瓦内張構造。高さ83・82メートル、頂部直径は、外形4・8メートル、内径4・57メートル、底部は、外形6・4

メートル、内径5・49メートルです。煙突間の距離は、1号・4号間が64・62メートル、2号・4号間が10・97メートルで、【図1】のようにひし形をしていました。このような配置のため、見る方向によって一〜四本に見えたのです。

昭和三年（一九五七）、煙突をシルバーコーティングしたことにより、見栄えがよくなり、ますます人々から愛される煙突となりました。

■土俵の大きさ 筆者は、「煙突のてっぺんの内側は、土俵の広さと同じだよ」と教えられました。

土俵は、尺貫法で直径一五尺ですが、メートル法に換算すると、一尺は30・3センチメートルとして、土俵の直系は4・55メートルになり、煙突頂部の内径4・57メートルとはほぼ同じになります。畳十二畳半です。

煙突頂部で関取が相撲をとっている姿を思い描くと、なんとなくユーモラスではほえましくなり、煙突への愛着が一層強くなりました。

■煙突撤去とその後 筆者は、昭和三八年五月七日の解散式当日千葉火力発電所への異動が命ぜられ、翌八日新任地に赴任しました。千葉火力は新鋭火力の先駆けであり、同年度入社生はすでに現場で活躍していました。千住火力のアナログ卒業生は彼らと二年間の差があり、追いつき追い越せを念頭に新鋭火力の知識を叩き込むのに精いっぱいだったため、千住火力の撤去について目を向ける時間がありませんでした。

このため、撤去についての記憶がないため、先輩の姫野和映さんの「お化け煙突物語」から引用します。なお許し願えれば幸いです。※引用の許可を得ています。

「撤去工事は、電気、タービン、ボイラーおよび運炭装置の各設備とも平行して始められた。（中略）煙突は、1号（西）と2号（南）の解体運搬が七月下旬から九月にかけて始められ、九月から3号（北）と4号（東）の解体が始まり、十月末に終了した。

撤去作業は、まず煙突頂上部分の内側に8台のチェンブロックで作業台を固定し、その作業台の上にフリーポーズと呼ばれる先端に滑車の付

いた丸太を立てる。フリーポーズトラという筋交いにワイヤーロープで煙突頂上部分に固定される。地上にはウインチと呼んでいるワイヤーの巻き上げ機を設置して、その前面の煙突下部に3メートル四方の穴をあけ、ワイヤーを作業台まで揚げてフリーポーズの滑車を通して煙突の外側に出しておく。煙突の内側には耐火煉瓦が張ってあるがこれは簡単にはがれたという。

煙突本体は、上から3メートル×幅1・5メートル程の大きさに切り離される。切り離す鉄板は、あらかじめフリーポーズの滑車から延びているワイヤーで吊るしておき、切り離してからウインチで下まで下ろす。ひと回り切り終わると、作業台を2メートル下に降ろして、同じことを繰り返した。

煙突は約83メートルもあるから大変な作業であったことは間違いないが、事故もなく十月末にはほぼ解体が終わり、十一月には完全に姿を消した。」ということでした。

日本の国が、東京オリンピックの余韻に浸っているなか、千住火力発電所は静かにその役目を終えたのです。

※フリーポーズ：振り坊主。簡易揚重機の一つ。

（元千住火力発電所職員）